

小窓

小窓にはり付く者達
かつてない中性的白夜
ある種の隷属が孤独を癒す部屋となりうる

分散された　　、いや、分断された距離
細く張り巡らされ、たやすく切り離しうる糸

(怠惰という自己保存を今は選ぶ)

過去に知るものの痕跡は跡形も無く
現在目にするものの透明さは
単にその薄さを露呈しているに過ぎない

(客体そのものでありうること?)

どれほどの高次元の近似式を使おうとするのか
どれほど無数の収集を行おうとするのか
可能性を高めるために

(不特定多数が同じものを手繰り寄せている)

その小窓はどこに通じているのか

(存外「孤独」へじゃないのか?)

(2003.4.27)